

ミュンヘンの「ユニ」探つ

林 尚孝

鵬外がエリーゼ・ヴィーゲルトと出会ったのはベルリンだったというのが一般的な通説であろう。しかし、筆者らは、彼女はミュンヘンの舞師であり、鵬外とミュンヘンで出会った女性ではないかと推測している。

鵬外がミュンヘンで過ごしたのは、一八八六年三月八日から翌年四月一日までの一年余である。その間の彼の足跡を辿ってエリーゼの手がかりを得たいと思い、「独逸日記」の地名や店名、人名などを調べ始めた。だが最初から壁に突きあたってしまった。問題はミュンヘン到着直後に選んだ下宿の所在地である。

十一日。午前居を藪街 Heustrasse (No.16, b. III Etage: bei J. Palm) に下す。家は大学衛生部と相対す。頗る便なり。僱居主人は商賈にして、夫妻皆淳朴。一女あり、年十四。善く洋琴を鼓す。(以下略)

ミュンヘン地図にあたって見たが、Heustrasse は見当たらない。藪街とはまぐさ街 (Heu...干し草、まぐさ) で、市の中心部にある町名としては似つかわしくない。しばらくしてミュンヘン在住の知人から Heustrasse は町名変更され現在は Paul-Heyse-Str. になっていることを教えられ、この問題は解決した。近くにオクトーバー・フェスト (十月祭) で有名なテレシヤ牧 (Theresienwiesen) があり、そこはかつて広大な牧場だったとのこと、町名の由来についても納得した。しかし、J. Palm がどのような人

物であるのかは不明であった。

鵬外がミュンヘンを去る日の「独逸日記」四月五日の条から、エリーゼと横山又次郎とが一緒に行動していたのではないかと推理した。その二週間ほど前の四月二日の条、さらにその一週間ほど前の三月二十五日の条にも横山又次郎の名前が出て来る。この日、鵬外は横山とヒルト Hirt 邸を訪ねている。

二十五日。横山又二郎とヒルト Hirt 邸を訪ふ。この人財巨万を累ぬ。所謂東洋癖ありて、好みて日域の骨董書画を聚む。家屋の結構壯大偉麗なること民頭府中その比なし。来り觀る者日に數十人。余等の応接所に入るや、既に五六の客あり。男女打ち雑れり。主余等を延いて諸室を見す。家凡そ三層。層々奇境を開く。人をして驚歎せしむ。日本の刀槍甲冑を以て壁を飾る具と為す。奇と謂ふべし。一女客柄鏡 Jorgnette を手にし、嬌声を発して曰く。美なる哉。此の如き粧飾は天才あるにあらでは成就せざるべしと。余を以て之を觀ればたゞ、錢のみ。何ぞ天才を要せん。余主人と語ること霎時のみ。未だその平生を審にせず。惟ふに凡庸の人ならん。

この Hirt について、ちくま文庫版森鵬外全集の注は次のように記している。

Friedrich Hirt (1845-1927) か。ドイツのシナ学者。広く中国の文物を研究し、西欧諸国との文化交流を調べた。

この Friedrich Hirt は、ミュンヘン大学講師から清国の税官吏に転出し、さらにアメリカ・コロンビア大学の教授としてシナ学を担当した人物である。

る。

この註記から、ことによるとエリーゼはこのヒルトの縁者だったのではないかと思いついた。なぜなら鵬外はミュンヘンを去るにあたって「舞師」の求めに応じて、その筆跡帳に漢詩を記している。「舞師」と鵬外とは、おそらく漢詩についても語り合う仲であったに相違ない。シナ学教授の縁者なら、そうした話題が出て不思議ではない。またエリーゼが若い女の身空で單身極東に旅したことも謎であったが、清国に長年暮らした経歴をもつ人の縁者ならあり得ることだろう。おそらくエリーゼは清国在住、あるいは訪問の体験があったのではないか。さらに一等船客として高い船賃を払ったことも、こうした人物の縁者なら不思議ではない。

そこでインターネットで Friedrich Hirt について調べたり、さらにはコロンビア大学のユニバーシティ・アーカイブスに彼に関する記録が残っていないか訪ねたりしたが、手がかりは得られず、作業は難航した。

しかし、このヒルト探しの過程で別の問題が生じた。それは鵬外らが訪ねた Hirt 邸が、果たして Friedrich Hirt の邸宅であったのかどうか疑問となったのである。なぜなら Friedrich Hirt が中国税関に勤めていたのは一八七〇年から一八九七年で、鵬外がヒルト邸を訪問した時点とちょうど重なっている。とても「主人と語る」ことなど考えにくい時期であった。こうして、筆者の Hirt 探索は中断してしまつた。

ところが、最近『鵬外』のバックナンバーを眺めていて驚かされた。問題はすでに、W・シャモニ「森鵬外のミュンヘン地誌」で解決済みだったのである。同稿筆者のシャモニは、当時ミュンヘン大学講師で、『独逸日記』だけでなく「うたかたの記」にある個人住宅や喫茶店なども調べあげて、その結果を地図上に示している。また、ミュンヘンは第二次世界大戦で市の主要部が破壊され、鵬外留学当時の建物ほとんど存在しないこと、通りの名や番地も大幅に変わっていることも指摘されていた。

鵬外の下宿についても詳細に記述されている。下宿は、現在の Paul-Heyse-Strasse (当時の Heustrasse) の三五番地にあたり、その目の前に Pettenkofer が所長を勤める Hygienischen Institut があったことを図示している。「家は大学衛生部と相対す」という「独逸日記」の記述どおりである。さらに、住民録の一頁を示して、家主の「Palm」についても紹介している。「Palm は Johann Palm であり、郊外にアルコー工場地を所有している。しかし、彼自身が店子であり、下宿人を置いていたことからすれば、それほど大きな工場ではなかったであろうと推測しているのである。

問題の Hirth については、次のような解説が加えられていた。

20325 に横山又二郎と共に Luise Str. にあった Georg Hirth の有名な邸宅(今はもうない)を訪れた。Hirth はミュンヘン文化界の中心人物で、もともと印刷所の持ち主であったが、のち出版社をおこし、又自

由主義的な著述家として文化史、美術史関係で筆をふるった。1889 年には Jugend という雑誌(これは明治末期に山本鼎等によって発刊された「方寸」のモデルといわれる)を発刊。さて、「家屋の結構壮大偉麗なること民謡府中その比なし」と鵬外の記す邸宅は「1889 年に落成したものであるが、これは芸術家、文化人の集まるところとなり、特に日曜の午後には種々雑多な人がやってくる招待日とまぎまぎしていた。こういう日の模様を鵬外が皮肉たっぷりに日記にとめていた。

何と Hirth は Friedrich Hirth ではなく、Georg Hirth であった。一八八四年に落成した邸宅なら、一八八七年にミュンヘン在住であったことも自然で、「芸術家、文化人の集まるところとなり」という説明も「独逸日記」と合致する。筆者のこれまでの疑問は水解決した。

疑問は水解決したが、どうしてこのような誤りが生じたのかという新たな疑問にとらわれた。現在もとても手軽に入手できる鵬外全集は、ちくま文庫版であり、岩波版にはない語注があることも便利である。その「注」に信用できない箇所があることも問題ではないか。シャモニ論文は一九八一年に発表されており、文庫版『鵬外全集』第一三巻は一九九六年発行だから、同稿を参照していれば避けられた誤りである。そこで筑摩書房編集部に電話を試みたところ、注釈は担当部員によって行われたという。担当者はずでに退社して事情を聞くことはできなかった。文庫版の「編集後記」によれば、「本全集は、一九七一年四月から九月に刊行された筑摩全集類聚

版森鵬外全集を底本とした」とある。つまり文庫版は「筑摩全集類聚版・森鵬外全集第七巻」を基にしたものであり、底本の語注は、三好行雄東大教授が行ったことが明記されている。三好教授は、一九九〇年に他界されており、文庫版はその後の発行であるから、シャモニ論文を参照しなかった責任は三好教授にはないであろう。それでは、なぜ教授はヒルトを、Friedrich Hirth と誤解したのであるのか。その原因は、一九五六年刊行の『岩波西洋人名辞典』にあると推測される。同辞典の「ヒルト」の項には「Hirt」と「Hirth」があり、「ヒルト Hirt」には「(1) Georg, 2) Hermann」の二人が載っている。「ヒルト Hirth」については「Friedrich」しか記載されていない。「独逸日記」がヒルトを Hirth と記しているから、注釈者は Hirt を参照しなかったであろう。類聚版の「注」は、この人名辞典の記載を要約記載したものと判断される。なお、文庫版では、「支那学者」が「シナ学者」に変更され、「特に絵画、陶器並びに」が省略されている。また、人名辞典では、「中国の海関に入り (1870-97)、その間、上海統計局に勤務 (1888)」との記述がある。これを見れば、Hirt が鵬外の訪問時にミュンヘンに仕込んでいなかった可能性は大である。おそらく注釈者もこの点に留意して「Friedrich Hirth (1845-1927) か」と断定を避けたものであろう。『岩波西洋人名辞典』の人名の誤記が、「注」の誤りを招いたことを知り、ようやく納得することができた。

なお、「森鵬外のミュンヘン地誌」の筆者・シャモニ (Wolfgang Shamoni: 1942-) 講師は「ミュンヘン

大学教授を経てハイデルベルク大学教授となり、そこで定年を迎えている。昨年、日独の相互理解に際立って貢献した両国の学者各一名に隔年授与されている「オイゲン・イルゼ・ザイボルト賞」の受賞者に選ばれている。

ドイツ大使館のホームページは、同賞の受賞者紹介で、以下のように記している。

「ヴォルフガング・シャモニー名譽教授(66)は、現代日本文学の優れた研究者・教育者として、ドイツだけでなくヨーロッパ全域で知られています。一九六六年にボン大学最初の日本学講座交換留学生として初めて来日し、二年間の学生・研究生生活を送ったことが教授のその後の歩みに大きな影響を与えました。一九八五年にはハイデルベルク大学に日本学講座を開設し、二〇〇七年に退職するまでその長を務めました。多数の論文と翻訳を通じ、日本文学および一九世紀後半から二〇世紀後半にかけての日本思想史に関する学術研究の場をドイツではじめて作り上げたのがシャモニー教授でした。その著作を通じて、現代日本の文化や精神の深い部分に触れることができるのは専門家だけにとどまりません。日本における同教授に対する高い評価は、二〇〇五年に旭日中綬章が授与されたことから窺い知ることができます」。

また、長谷川泉は、その著書でミュンヘン大学教授シャモニーの教授資格論文「初期の北村透谷―政治から文学へ」を紹介している。

「森鷗外のミュンヘン地誌」について、筆者は「ひ

まな折に少しずつ調べた」と書いているが、現地に住む研究者でなければ、こうした詳細な地誌を書くことはできなかったであろう。

このような形で鷗外研究が外国人によってすすめられていたことに感銘を受けると同時に、鷗外研究の裾野の広さを実感した「ヒルト^[11]探し」の旅であった。さらに広く用いられている全集の註記といえども盲信すべきではないこと、まして注釈者が断定を避けていた点を見落としていたことも、あらためて反省させられた。

本論稿作成にあたり、助言を賜った畏友二村一夫法政大学名誉教授と共同研究者小平克氏に謝意を表します。

(1) 林 尚孝・エリーゼはミュンヘンの「舞師」である、『鷗外』八三号、二〇〇八年七月

(2) 小平 克「うたかたの記」のマリーのモデルはエリーゼである、『近代文学資料と試論』第八号、二〇〇八年七月

(3) 「独逸日記／小倉日記」、森鷗外全集第一三巻、一五五頁、ちくま文庫、一九九六年七月

(4) W・シャモニー・森鷗外のミュンヘン地誌、『鷗外』二八号、一九八一年一月

(5) 『筑摩全集類聚版・森鷗外全集第七巻』筑摩書房、一九七一年八月

(6) 『岩波西洋人名辞典』岩波書店、一九五六年一〇月
(7) 長谷川泉「鷗外文学と「独逸」紀行」、明治書院、一九八五年一二月

壽 鷗 外 記 念 會 通 信

No.172 秋

ベアーテさんたちのご苦勞を思う時、東京の事務局（つまり私）は恵まれていることだとあらためて感じたことでした。

再三お知らせしたように世田谷文学館において今、《父からの贈りもの 森鷗外と娘たち展》が開かれています。規模の大きな展示会になっております。そして記念会の山崎一穎会長や須田喜代次常任理事が講演をなさいます。

十月二二日には富山大学において記念会名誉会員の長島要一コペンハーゲン大学教授を招いてシンポジウムが開催されました。長島先生は基調講演として「文化の翻訳者 森鷗外」という題で話され、シンポジウムでは金子幸代富山大学教授（記念会理事）が「森鷗外における東西の融合」という題で話されました。取材にまいりましたので、次号にてご報告する予定です。

この記念会通信では、会員の皆様の日頃の研究活動や鷗外に関係する行事などをお伝えしたいと思っております。どうぞ情報をお寄せください。

森鷗外記念会通信

No. 172

発行 平成二十二年十月三十一日

編集責任者 倉本幸弘

発行所 森鷗外記念会

郵便番号 一〇二一八五五五

文京区春日一丁目十六番二十一号

シビックセンター十七階

文京区アカデミー推進部アカデミー推進課内

森鷗外記念会事務局

電話 〇三―五八〇三―一八四九